九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『學生寫眞帳』から見た九州帝國大學農學部の留學生

金，珽実
九州大学留学生センター ： 講師

https://doi.org/10.15017/4777994

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 23, pp.21-32, 2015-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2015，第23号，21－32
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2015, No.23, 21-32

『學生寫眞帳』から見た九州帝國大學農學部の留學生

金　　斑　実*

1．はじめに

手元に九州大学中央図書館所蔵の『学生写真帳』がある。1929年（昭和４年）から1943年（昭和18年）までの九州帝国大学農学部に入学した学生の写真を伊呂波順（昭和８年まで）・五十音順（昭和９年から）に並べてファイルし、大事に保存されたものである。なお、九州大学で公開されている写真帳は今の所、この一冊しか見当たらないことを付言しておく。

九州大学留学生に関する研究としては、①九州大学韓国研究センター『朝鮮半島から九州大学に学ぶ　留学生調査（第１次）報告書　1911～1965』（2002）と、②研究代表者　折田悦郎『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』平成14・15年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（2004.3）がある。①は、九大創立以来、アジアに対して学問的な目を向け、多くの留学生・研究者等を受け入れ、アジアにおける中核的な研究拠点として役割を担ってきており、特に地理的にも近く、歴史的にも関連の深い朝鮮半島から多くの留学生が九州大学に学んだにも関わらず、その実態が明らかではないことに問題点があると述べ、留学生の足跡をたどり、帰国後の韓国社会における卒業生の活動を明らかにしたものである。②は、国際化時代に国立大学における留学生関係史料の調査や研究があまり行われなく、特に戦前における個別大学での留学生（受け入れ）制度史関係史料の収集といった基礎的作業は殆どなされていないことに問題点があると述べ、九州帝国大学時代の留学生（受け入れ）制度について九州大学にある史料の調査とその調査史料を用いた研究活動の結果である。殊に、「九州帝国大学留学生名簿」は戦前期に九州大学に留学した中国、朝鮮、台湾、満洲、タイ、アメリカ、ベトナム出身の大学院生、学生、専攻生、生徒などに関する名簿を網羅したもので、貴重な史料である。

その他に、九州大学出身者の個人史について触れたものがある。武継平『異文化のなかの郭沫若　日本留学時代』九州大学出版会（2002）、緒方一夫「九州大学のベトナム交流秘話」『九州広報』47号　（2004.9）、金斑実「福岡にゆかりのある間島朝鮮人－盧基舜を中心に－」『日本語言文化研究　第三集下』（2014.6）がある。

本研究では、以上の先行研究を踏まえて、農学部『学生写真帳』を基に留学生データを作成し、九州帝国大学新聞記事及び収集した史料を参照しながら留学生生活、その後の活躍などについて触れたいと思う。

*九州大学留学生センター講師

2.『学生写真帳』に於ける留学生データ

延べ53ページからなるこの写真帳から、朝鮮・中国・台湾・満洲国・タイからの留学生のデータをまとめると以下の表のようになる。

年代	学科別	学生数	留学生数	国別	名前
昭和四年	農学科	39			
	農芸化学科	39			
	林学科	15			
昭和五年	農学科	40			
	農芸化学科	40			
	林学科	15			
昭和六年	農学科	39	2	朝鮮	李起仁、韓巖回
	農芸化学科	39			
	林学科	15			
昭和七年	農学科	39	1	朝鮮	李鐘諄
	農芸化学科	39	2	朝鮮	崔炯錬
				中国	沈学源
	林学科	14			
昭和八年	農学科	39			
	農芸化学科	40	3	台湾	張洪蚶、張信成、詹漢文
	林学科	14	1	朝鮮	玄信圭
昭和九年	農学科	36			
	農芸化学科	35	1	中国	沈鶴書
	林学科	12	1	中国	謝有徳
昭和十年	農学科	39			
	農芸化学科	39	3	中国	宣塔
				台湾	洪遜堯
				満洲国	呉錦
	林学科	13			
昭和十一年	農学科	30			
	農芸化学科	38			
	林学科	13			
昭和十二年	農学科	18			
	農芸化学科	27	2	朝鮮	金振世、崔應祥
	林学科	8			
昭和十三年	農学科	20	1	朝鮮	金俊輔
	農学科（農業工学専修）	5			
	農芸化学科	31			
	林学科	8			

昭和十四年	農学科	19	1	朝鮮	全仁煥
	農業工学専修	3			
	農芸化学科	26	1	朝鮮	李春寧
	林学科	12			
昭和十五年	農学科	23	2	朝鮮	金寅權、李春成
	農学科（農業工学専修）	6			
	農芸化学科	34	2	朝鮮	張貞鉉、朴奉守
	林学科	15			
昭和十六年	農学科	17	1	朝鮮	金川寅煥（金寅煥） 創氏改名
	農芸化学科	29	1	満洲国	楊培森
	林学科	8	1	朝鮮	竹川正一 創氏改名
	水産学科	4	1	朝鮮	梁瀬正雄 創氏改名
	農業工学専修	3			
昭和十七年	農学科	14＋28	2	朝鮮	白川載英（趙載英） 創氏改名
				中国	余志強
	農芸化学科	25+21	2	朝鮮	黄村義吉
				満洲国	王文九
	林学科	10＋11	3	朝鮮	青松秀昌、和田吉弘 創氏改名 李重熙
	水産学科	7＋4	2	タイ	ブンヴィチタラ、 アマタヤクル
	農業工学科	4＋8	1	中国	湯麟武
昭和十八年	農学科	26	2	満洲国	閻壮志、孫昌其
	農業工学科	9			
	農芸化学科	20	1	朝鮮	張川建型（張建型） 創氏改名
	水産学科	5			
	林学科	14			

（昭和十七年度は４月入学と10月入学の二つに分かれているため「＋」で表記した。）

このように、このデータから、1929年（昭和４年）から1943年（昭和18年）までの時期に韓国から23名、中国から６名、台湾から４名、満洲国から６名、タイから２名が農学部に在籍したことがわかる。

３．農学部の歴史

まず、九州帝国大学の歴史について触れておこう。「九州帝国大学医科大学の前身は福岡医学校にして明治36年同大学創立以来満25年の星霜をへたり、其の間多数の医学士を養成し幾多医学上の発明研究を成就発表し、以て帝国の教育及び医術衛生に貢献すること少なからず惟(おも)ふ」と『九州帝国大学医学部25年史』で初代総長である山川健次郎が祝辞で述べている。つまり、九州帝国大学は1903年（明治36年）４月に設置された京都帝国大学福岡医科大学[1]を前身

としている。1911年１月にはこの福岡医科大学と新設の工科大学が合併する形で九州帝国大学が成立された。九州帝国大学は、東京、京都、東北に次ぐ日本の４番目の帝国大学として発足したのである。留学生受け入れは、1910年京都帝国大学福岡医科大学に入学した朝鮮人学生の金台鎮が嚆矢で[2]、1945年までに中華民国、「満洲国」、タイなど、また当時植民地たる台湾、朝鮮の出身を含めて、約733名の留学生を受け入れた。

その流れの中で、九州大学農学部は福岡県の寄付（135万円）と1919年（大正８年）２月の官制によって設置された。この時、既に東大と北大にはそれぞれ駒場農学校と札幌農学校の後身である農学部が存在しており、九大農学部は三番目の農学部の創設であり、当初から総合大学の一部として発足した最初の農学部であった。1918年（大正７年）４月、本田幸介朝鮮総督府勧業模範場技師、古在由直農事試験場技師兼東京帝国大学農科大学教授が農科大学創立委員を属託され、翌1919年（大正８年）４月には河合鉓太郎東京帝国大学教授が創立委員に加わり、創立準備に着手した。1919年（大正８年）２月帝国大学令の改正により農科大学の名称が農学部と呼称され、官制上の設置をみるに至った。1920年（大正９年）８月に農学科５講座が設置され、本田幸介が教授に任命され、初代学部長に就任した。1920年（大正９年）９月に竣工、1921年（大正10年）３月に農学と生物学教室がまず竣工し、同年４月から本科３名、選科４名の学生を持って農学科の授業が開始された。

戦前に設置された学科は以下のようである。

1921年（大正10年）４月　農学科
1922年（大正11年）４月　農芸化学科　林学科
1941年（昭和16年）４月　水産学科
1942年（昭和17年）４月　農業工学科

また、九州帝国大学は農学部設置以前から、樺太、朝鮮、台湾に大学直属の基本財産として演習林を所有していた。これらの植民地の付属演習林は農学部に付属された。

九州大学農学部の開学当時の教育、研究の根本方針は[3]、

> 農学ハ一種ノ応用科学ナリト雖モ授業ノ方針余リニ応用ニ偏スルトキハ大学トシテ存立ノ意義ヲ喪フヘク又若余リニ理論ニ失センカ農界指導ノ本義ヲ没却スルニ至ラン故ニ本学部ハ克ク其ノ中庸ヲ保チ理論ト実際ト併セ咀嚼熟達セシメ進ンテ研究ニ従事セントスルモノニモ亦出テテ実社会ニ活躍セントスルモノニモ共ニ遺憾ナカラシメンコトヲ期ス
>
> 学術ノ進歩ハ年ヲ逐ヒテ専門分化ノ傾向ヲ助長スルコト言フ俟タスト雖徒ニ微ニ入リ細ヲ穿チ講義ノ種目ヲ増大シ時間ヲ延長シ以テ学生ノ負担ヲ過重ナラシムルハ却ツテ天賦ノ才器ヲ萎靡セシムルノ虞アルカ故ニ本学部ニ於テハナルヘク課目並ニ時間ノ数ヲ少ナクシ比較的実験並ニ実習ノ時間ヲ多クシ学生ヲシテ自習研究ノ余地ヲ裕ナラシメントス
>
> 学術的研究ノ実績ヲ挙クルハ大学ノ生命

1　福岡と熊本との間に激しい「大学」誘致運動があったが、福岡になったのは同地が筑豊の「石炭」、八幡の「鉄」の近隣にあり、かつ大陸へ玄関口に位置していたという地理的条件も大きな要因であったとしている。（折田悦郎2004）p.1

2　「朝鮮人金台鎮を準学生として入学を許可せり、之を外国人入学の嚆矢とす」（九州帝国大学医学部編1928.10）p.56

3　九州大学農学部創立50周年記念会編『九州大学農学部五十周年』九州大学農学部 1971.10　pp.2-3

トスル所ナルカ故ニ本学部ニ特ニ意ヲ此点ニ注キ可及的多クノ経費ヲ研究ノ為ニ割クト共ニ教官ノ研究時間ヲ多カラシメ又業績ノ発表ニハ能フ限リノ便宜ヲ図ルヲ旨トセリ。（註：下線は筆者、以下同様）

つまり、教育には理論と実践の比率を保ち、自由研究させること、学術研究には実績を挙げることが求められていた。

4．九州大学帝国新聞からみた農学部留学生

4－1．1938年（昭和13年）入学の金俊輔についての記事

「高文合格の異彩　農科の金君　行政科筆記試験にパス」昭和14年11月22日

二学年在学中而も畠違ひの農科学生が天下の難関高文行政科筆記試験に合格した話

九大名誉教授の湯川又夫博士が校長である朝鮮水原高農出身、昭和十三年農学部農学科入学の金俊輔君がその人である。

合格の通知を受けた同君の感想をたゝくと、

高文は運が悪いと仲々通り難いのですが、私は全く運が良かったのです。準備は去年の十月学校の試験が終わってから始めたのですが、暇のある時は大抵本を見ていました。

と謙遜の中にも嬉しさをたゝへて語った。

尚同君の栄冠は全然人を頼らず独学の賜であるとの事である。

4－2．田中義麿[4]教授の留学生について記事

「支那留学生について」昭和３年６月５日

十五年前に比べると日本に於ける支那留学生の数は非常に減少したが、それと共に彼等の素質もよほど好くなったやうに思はれる、従って日本に於て白日街頭民国人に対し妄りに罵言を弄し軽悔の態を為すものの殆其跡を絶つに至ったことは両国のために喜ぶべき現象である。

今日に於ては中華民国の留学生にして正規の大学教育を受け邦人学生の間に位して何等遜色なき者もすくなくない、勿論之と共に基礎学の知識に於て著しく劣り、大学の講義を理解するに不十分と認むべきものの存することも事実であるが、…に日本語に対する素養の不十分なるがため、本来の能力を発揮し得ないものもあらう。

･･･よく世間では「支那の留学生はいくら世話をしてやっても無駄だ、彼等は本国に帰るとすぐ排日の急先鋒になる」などといふ人がある、一を知って十を識らざる言である、なるほどとさういふ例もあらう、決して絶無とは言はない、併し全部若しくは大部分の日本に於ける支那留学生が帰国後排日に音頭取になるとは決して信じられない。

･･･言語は力の偉大さを想へ、人をして喜ばしむるも悲しましむるも怒らしむるも楽しましむるも皆言話の偉力である、一言いてては四も及ばす、一語の誤は時として死を招き、大にしては城を傾け国を亡ぼすことさへもある。然り而して世界広しと雖、日本の外に吾大和言葉を学ばんとするもの支那を措いて他に是有らん

4　田中義麿（たなかよしまろ）大正・昭和時代の遺伝学者。明治17年10月６日に長野県生まれ。母校東北帝大農科大学（現北大農学部）の助教授を経て、大正10年４月の転任発令により、九州帝国大学で養蚕学と遺伝学の講義を開始。大正13年教授になり、昭和20年９月に定年制により退官となる。昭和24年国立遺伝学研究所研究第一部長。カイコの遺伝研究を通して近代遺伝学の基礎を築き、日本育種学会、日本遺伝学会の創立に関わった。昭和47年７月１日に87歳で逝去。著作に「遺伝学」などがある。

や。吾人の支那に対する。他諸外国に対すると同一なるべき筈がない。

支那諸大学中、最完備せるもの、随一なる最完備せるもの、随一たる嶺南大学に到り、その農科に於て拙著「蚕糸学教科書」が支那語に翻訳せれれて講述されつゝ有るを見たとき、何よりもまづ胸底に湧いたのは彼等に対する深い親愛の念であった。

支那留学生を通じて日本語を以て日支両国の国交を結ばしめよ、国交といふ言葉に政治的の響きがあるならば、むしろ両国人の心を結ばしめよと言はう。

われらは過去に於て支那に学ぶ所が多かった、さうして支那から輸入された漢字は吾邦の国字となって文化の発達を助けた。

今日、日本に留学する支那の留学生は、日本の文化を支那に移植し、日本の勢力により諸般の改良を遂行せんと企てつゝある、さうして彼等は日本語の通用区域を拡大しつゝある。乃ち大学の教職に在るものは出来るだけ彼等の研学に便宜を与へ、同学の学生は胸襟を披いて隔意なく交際し、以て彼等に好き印象と充分なる諒解と豊富なる実力とを携へて帰国せしむべきであらう。吾人之を言ふ、敢て功利的見地からするのではないむしろ隋唐時代の支那に対する返礼として吾ゝの愉快なる義務と信ずるからである。･･･

4－3．留学生の状況に関する記事

①「満洲新国家[5]の留学生を如何う取扱ふか　岡部学生課長談」昭和７年５月４日

本学には満洲より三人の留学生が派遣せられているが先般新国家が生れ出で事実上中華民国から独立した訳でその為め前期留学生を満洲国留学生として本学が率先して認めるとの報道が二三の新聞で見えたので、岡部学生課長を問へば之を否定して次の如く語った

新国家は事実上中華民国より独立しているとは云ふが未だ吾国政府は正式には承認していないのであるから、政府直轄の本学が該留学生諸君を満洲国留学生として承認し又は取扱ふ等といふ事は有り得ない訳だ、然し事実上は満洲国留学生であるのだから之を中国留学生と同様に取扱ふのは些か変には思ふのだが止むを得ぬ

②「本学に集まる留学生激増」昭和11年６月５日

日満支の融和親睦の声高らかに叫ばれる今日本学に於ける学的交渉による共和の実如何にと本部の学生課に三原氏を訪へば同士はいとも懇切に一々帳簿を操って話して下されてが何分全学部に亘り各学部とも随時自己の自由なる方針によって教授している為、其実情を一々調べることは殆ど不可能であるとの事に、此度は人数の統計のみを表示して諸君の御参考に供しよう。

	中華民国	満洲国
大学院	医一、　法文一	
医学部	三	
同専攻生	二四	一
工学部	六	一
農学部	一	一

5　昭和６年（1931）９月に勃発した満洲事変が起き、昭和７年（1932）１月には関東軍は満洲全域を占領した。３月１日、黒竜江省・吉林省・遼寧省を領域とする満洲国の建国宣言が出され、９月15日、日本は満洲国政府との間で日満議定書に調印し、満洲国を正式に承認した。日本、その中でも関東軍の強い影響下にあり「大日本帝国と不可分的関係を有する独立国家」と位置付けられていた。当時の国際連盟加盟国の多くは満洲地域は法的には中華民国の主権下にあるべきとしたが、このことが1933年（昭和８年）に日本が国際連盟から脱退する主要な原因となった。

同専攻生　二三　一
法文学部　六
同専攻生　三二　三

右（上）の如く本学に於ける両国留学生は近時増加し百人に近き中華民国入学生並に七人の満洲国人学生を収容し各学部の教授が大学院学生に対すると同様個人的に教授に当って居られる為此等留学生諸君と諸教授の人格並に学理の交渉によって、東洋の三大国の親善の為貢献していることは決して少なくないと信ずる。尚右の中華民国留学生中女子十名が加はって居るのを見ても同国に於ける女性の進出目覚しく我国女性の一考を要する所であらう。

４－４．留学生活動に関する記事

①「懐かしい母国語で囃いだ歓迎会　新入学の同胞を中心に中華留学生の集り」昭和６年５月５日

戦乱の母国を後にしてヤングチャイナを建設する決意を持った隣国中華の若い志士が我国に安静なる研鑽の地を求めて来る者は毎春多数に上って居るが本学に於ても医、工、農、法文各学部合せて中華留学生総数四十名に及んでいるが今春新たに渡来した新留学生を迎へる留学生同窓会主催新入生歓迎会が去る二十八日午後五時より本学新食堂に於て開催された、母国の同胞と会合するの楽しみは又格別と見え、定刻前より早くも三十名以上集り懐かしいマザアトンで語り合ったが彼等の囃いだ話声も女給さん達の耳には異様に響いた事であらう、会は先づ幹事の歓迎の辞に始り続いて新入生代表に推薦された朱毅如女史起って明晰なる好調で答辞を述べ直ちに晩餐を喫しつゝ歓談に遷り最後に余興で満場大歓声を上げ、非常な盛会裡に九時半閉会した

②「ここは学園　本学留学生　招待懇親会」昭和10年６月20日

本学では満洲国並びに中華民国から遥々留学に来ている学生の異国生活を慰める為め十三日午後六時から九大工学部構内第三学生集会所で懇談会を開いた。本学からは松浦総長を初め生源寺工学部長、奥田農学部長、岡部学生課長以下留学生係及び医、工、農、文各学部事務主任等が出席し（小野寺医学、三田村法文両学部長は旅行中に就き欠席）留学生側は、満洲国、中華民国の男女学生80余名が出席したが、先づ松浦議長の旅情を慰める旨の挨拶があり、留学生代表として小野寺内科副手林登発氏が答弁をのべ、次に各学部代表一名宛及び卒業生代表法文副手彭偉烈氏の挨拶があった。互に歓談をつくし、留学生の母国語の唄やかくし芸等余興も誠に面白く、ここは学園、学を通じての和やかな風景を描き出された。かくて午後九時盛会裡に散会した。

③「アジア会　恒例歓迎会」昭和13年５月20日

満洲出身者の親睦をはかるアジア会では五月十三日福新楼にて新会員六名を迎へ歓迎会を開催、開会劈頭会長法文学部田中助教授の歓迎の辞あり、懐しい支那印象に舌を打ち熱した頬に新緑薫る聞風を心地よく受けながら遥かに故郷満洲の地に思ひを馳せ、盛会裡に幕を閉じた。尚九月に次回懇親会開催の予定である。

４－５．留学生である張兆豊が書いた記事

1936年張兆豊法科大学院　福建省　長崎高商「留学生後日物語」昭和11年11月６日

はしがき

負笈東瀛、青松白砂の博多湾に聳え立つ九州帝国大学に、我が中華民国留学生が学びの道にいそしみ、三星霜或ひは四歳月の間言語風俗習

慣食物の不便を忍び異地異郷の日本に在りて艱難険阻変幻多端な大学生活を卒へ、或ひは卒業後も専門学術に切磋琢磨する事数年蛍雪の功空しからず、錦を着て故国に帰り、その後の消息に至っては、全く不明で殆ど未知数ＸＹＺの儘、徒らに一般人士に『知り得ざるものとして』有耶無耶にする事は実に惜い事で、茲に開学二十五周年記念を機会に集められた消息で其の一端を述べ得る事は蓋し興味深々意味長長、当時のクラスメート及び其他の関係者をして思ひ出又は友誼のつらなりと成り得ば筆者望外な喜びである。

一概に留学生と称しても九大開学以来卒業生として本国に活躍する者既に百二十三名の多きに達し最近二、三年の事ではあるが専攻生として所定の一部門を特に研究し其の蘊奥を極め得て帰国して勇往邁進する者既に十指に余る。

物語の内容も粗陋簡略、正確を期し得ないものであるから或は読者をして満足せしめ得ないかも知れないが、努めて実をあげたいと思っている。

惟ふに九州帝国大学は中華民国は地理的に一衣帯水の近きにあるのみならず、留学生を遇する事殊に親切、学術を指導する事特に周到、和気藹々の気、学園に充ち充ち他の帝国大学の敢て真似し得べからざる気風あり、誠に宜なる哉、九州大学留学生中より黎明中華民国を牛耳る偉材傑人の輩出するを見よ。借問す！日本の識者にしてかゝるより好き半面に注目する者果して幾何ぞ！

農学部は大正十年に創立され、九大各学部中最も浅い学部である。この農学部の最初の入学生は大正十五年卒業の陳世璨氏他三名で、陳氏は目下山東建設庁内に於て枢要ば地位を占め、其他の三名は農科大学或いは専門学校の教授として行進の指導に、又農村更生に賢策を献じている。

この学部の留学生は昭和十一年三月現在迄卒業生は十七名で、その内半数は大学教授として日本で習った各専門学科を続けて研究し、各々学界に於ても羽振りを利かせて居る。

殊に昭和十年卒業の沈学源君は今般南京国立中央大学の教授として招聘され最新日本の農芸化学の紹介に必ずや貢献するところあらん。

其の他の半数は各省政府の重要農業の発展、進歩、増産、軽量の画策の為、益々前途洋々として活動して居る事は諸子と共に喜びたい。

最近頓に殖えた農学部の専攻生中にも去る七月北平の国立高等農林の教授として赴任した何国模氏あり。氏は白皙痩身風采至って上がらぬ者であったが日夜昆虫の研究に没頭した為、遂に学者に認められ、今日の地位を能く得たと聞く。須らく好漢自重せよ。

上述の如く国家有為の志士仁人を順調に育んで呉れたのは九州帝国大学教授等の指導宜敷きを得又その学識非凡の致す所なれば誠に中華民国の為感謝に堪へぬ。・・・

以上のように、『九州帝国新聞』には留学生の待遇問題、留学生の変遷、留学生の人物像、留学生活動、留学生が書いた記事、本学教師が書いた記事など多くのものが発表されており、本稿の内容はその一部分に過ぎない。

5.「留学生後日物語」（その後の活躍）

では、張兆豊の引継ぎ作業として農学部出身者のその後の活躍について触れておこう。

5－1．中国出身者

①沈学源　浙江出身の沈学源は1932年から1935年まで農芸化学科で勉強し、後に大学

院に入学したが、同年帰国する。その後、江西省農学院技師、国立中央大学農化系教授、重慶上川工業公司農化場工場長、中国粮食工業公司農化場工場長、上海誠意油場工場長、上海水産学院教授兼江南大学教授、南京工学院教授、無錫軽工業学院教授を歴任し、1985年７月に病気により逝去した。主な著訳に日本工業化学会満洲支部編沈学源訳『東三省物産資源と化学工業』商務印書館などがある。

②余志強　1924年生まれ、1941年11月興亜院補給生として来日し、東亜学校で日本語を勉強する。1942年10月に「外国人特別入学」として農学部に入学し、農学科園芸学教室に所属、伊藤寿刀教授と福嶌英二教授の下で勉強する。1945年９月に同学部卒業して、大学院に進学し、1946年９月10日大学院を退学して帰国するが、それと同時に香港にある会社に就職する。1957年春に中国政府の「技術人員帰隊」との呼びかけに応じ、広州に戻り、広東省農業科学院蔬菜研究所に勤務、1987年の定年から顧問として広州市郊外に駆けつけ、野菜の育種・栽培に力を尽くしている。1987年中央農業部、上海農科院の方と一緒に日本を視察し、旧遊の地を訪ね、九大にも足を運んだ。

③湯麟武　1922年６月24日の江蘇武進出身で、1942年に九州帝国大学農業工学科に入学して、1945年９月20日に水利組卒業する。1945年に台湾行政長官公署交通処の要請により台中港の受継ぎに協力、1946年～1961年に基隆港務局設計課長、台中港工程処処長、1961年から1986年に成功大学水利工程系副教授・教授になる。1971年から1984年に台湾大学海洋研究所兼任教授、1972年に成功大学水利及び海洋工程研究所を創立した。成功大学に在籍している間の1965年10月から1966年９月に九州大学工学部に於いて、研究生として「遠浅海岸の波と漂沙の問題について」を研究し、1968年に「遠浅海岸における波の推算法に関する研究」で九州大学工学博士号（工博乙第52号）を取得した。2012年８月22日に90歳の高齢で逝去するが、台湾海岸工程の父と呼ばれている。

５－２．満洲国出身者

①呉錦　1938年に卒業後、東北大学自然科学教授・副院長、1949年以降は東北工学院副学務長、瀋陽軽工学院副院長、中国科学院環境化学研究室主任、研究所顧問、教授、ＵＮ環境企画署環境情報資料諮問中国国家連絡主任を歴任した。
著書として『環境情報科学の研究及進展』中国科学院環境化学研究所（1982）、川北公夫・藤田四三雄著、呉錦訳『環境化学』中国科学院環境化学研究所（1988）などがある。

②閻壮志　1940年満洲国留学生予備校第３期卒業生として東京高等農林学校に入学し、1943年に九大に入学する。主な著書に閻壮志、呂大州主編『農業経済学』吉林人民出版社（1987）、閻壮志、劉紹先『畜牧業企業官吏経営管理』上海教育出版社（1991）などがある。

③楊培森　1919年10月に中華民国吉林省楡樹県秀水甸子生まれ、1943年卒業後ハルピン農事試験場農芸化学科に高等官試補として勤務し、1946年８月から国立長春大学農学院農芸学系講師を経て、1948年８月から台湾省台北県立双渓中学教頭になる。

1954年８月から台湾省立農業専科学校の講師として勤務し、1960年に副教授になる。その後、1962年10月から九州大学農学部研究生として入学し、1963年９月に退学して元職に戻るが、1964年から８月から教授となる。1967年に九大で「台湾西部における耕地土壌の粘土鉱物に関する研究」の論文テーマで博士学位（1967年12月28日乙第588号）を取得することになる。

④孫昌其　卒業後九大に一年いて帰国する。幾多の変遷を経て定年まで農業科学院技術情報センターに勤務していた。1997年１月に急死するが、亡くなる前に東京農工大学中国同窓会代表を務めた。

５－３．朝鮮半島出身者

①韓巖回　九大を卒業して、南満洲農村千一農場の農村振興会連合会理事、上海中華日報社の河南省支社長、大韓独立促進国民会尚州支会長、尚州地区司法保護委員会の常務委員、1948年国会議員を歴任し、1975年に逝去する。朝鮮戦争時に朝鮮民主主義共和国に行ったという一説もある。

②李鐘諄　国会議員に当選され、韓国の農山漁村の振興のために活躍していた。

③玄信圭　1911年12月９日生まれ、1936年３月卒業して志願して清涼里にある林業試験場に就職し、1937年６月に朝鮮総督府林業試験場技手になる。1942年４月に朝鮮総督府林業技術員養成所講師を経て1943年９月に九州帝国大学農学部副手と1944年４月に農学部森林土壌学の授業を担当になる。1945年５月に農学部附属演習林の業務を担当し、解放後の1945年10月には朝鮮国立林業試験場長、1846年１月には朝鮮米軍政庁水原農林専門学校教授から1946年10月ソウル大学校農科大学副教授、林学の教授になる。水原に設置された林木育種研究所の研究指導に力を尽くしている。1949年７月25日九大で「日本産あまのり属ノ分類学的研究」という論文名で農学博士号を取得した。

山林庁林業試験場『林業試験場六十年史』（1982）に「林業試験場在職時の追憶」を発表した。

④崔應祥　1965年８月から1966年３月まで農林畜産食品部 次官補、農村振興庁長、農漁村開発公社顧問などを歴任する。主な著書に『農政十年史』崔應祥編著　世文社（1959）がある。

⑤金俊輔（1915 ～ 2007）全羅南道霊岩出身で、水原高等農林学校を卒業する。1939年九州帝国大学在学中に高等文官行政課に合格して卒業後1942年漣川郡守、1944年から45年まで行政公務員として在職した。1946年10月水原農科大学校教授として赴任し、農業経済学科を創設した。1946年から62年までソウル大学校農科大学教授、1965年から80年まで高麗大学校政経大学教授、1982年から87年まで韓神大学校の待遇教授、1957年から70年まで韓国農業経済学会の初代会長、1971年から73年まで韓国統計学会の初代会長、1978から80年まで韓国経済学会の会長を歴任した。主な著書は『土地改革論要綱』三一出版社（1949）、『農業経済』『土地改革論要綱』『農業経済学序説－韓国資本主義と農業問題－』などがある。

⑥金仁煥　済州知識産業振興院の院長を務めた。

⑦李春寧　九大卒業後、佐々木周郁教授の下で合成繊維の研究を行い、帰国した。水原

農林専門学校の農芸化学科長、学長、韓国農化学会会長を歴任した。1953年にジョウージタウン大学で学位を取得し、韓国における生物化学界の第一人者である。主な著書に『李朝農業技術史』韓国研究院（1964）、安鶴洙・李春寧・朴壽現代表著者『韓國農植物資源名鑑』一潮閣（1982.1）などがある。1997年11月の九州大学農学部同窓会報に「当時をしのぶ」を発表した。

⑧金寅權　東亜製粉株式会社の専務であり、1969年忠南大学校で博士号を取得した、

⑨朴奉守　農漁村開発公社の事業の一環として済州島に甘蔗の糖化工場が建設され、その責任者として活躍した。

⑩金寅煥　水原にある農村振興庁長、韓国における農業関係の試験研究及び技術普及の総指揮者の役を果たす。『韓国の緑色革命：稲新品種の開発と普及』農村振興庁（1978.5）、『農事試験研究結果要覧：1905-1960』編輯人金寅煥　農村振興庁試験局（1962）がある。前著は翻訳本として『韓国の緑色革命：稲新品種の開発と普及』金寅煥著、片山平訳　全国農業改良普及協会（1979.9）が日本で出版された。

⑪趙載英　1919年生まれ、1942年水原高等農林学校農学科を経て1944年に九州大学農学部を卒業、1963年に高麗大学校の農学博士学位を取得、1945年～1955年中央農業技術院、1955年ソウル大学校教授、1957年～1984年高麗大学校教授、1957年高麗大学校実験農場長、1959年から1972年までＵＮ食料農業機構韓国協会農業専門委員、1977年食物学会長、1981年から84年まで高麗大学校植物資源研究所長、1983年環境農学会長などを歴任、科学技術賞、食物学会賞、国民勲章などを受賞した。著作に、『田作』郷文社（1980）、『作物学概論』郷文社（1983）、趙載英・李殷雄著『栽培学汎論』郷文社（2000）などがある。

⑫張建型　ソウル保健大学教授で、著書に、閔丙蓉・張建型著「わが国のいちごの品種別　冷凍加工　適性試験」『韓国食品科学会誌』（1969）、『食品の記号性と官能検査』開文社（1987）などがある。

以上、41名中19名の先人のその後の活躍を取り上げたが、その中で、湯麟武、楊培森、玄信圭の３名は、一時九州大学に戻り、工学部研究生、農学部研究生、農学部副手の経歴を経て、博士号を獲得した。また、田中義麿教授が感動したように、多くの日本の学問書を母国語に訳したり、執筆したりして、自国の学問の発展に貢献した。

６．まとめ

以上のように、戦前、元老の同門は綺羅星のように立派な先人であって、中国、台湾、満洲、韓国、タイの政治、経済や実業界を初め、教育界で大きな役割を果たし、今でも様々な分野で名声を博している。

九州大学では、今現在2,171名、農学部には234名の留学生（2014年11月の統計）が在学中である。しかし、このような先人達の軌跡はもう忘れ去られようとしている。国際化を進めている中で、もう一度振り返って先輩達の歩みをみる必要があるのではないかと思われる。そのため、引き続き九大留学生の史料を発掘し、研究を積み重ねていきたい。

【参考文献】

九州帝国大学農学部『学生写真帳』九州帝国大学農学部
九州大学農学部創立50周年編『九州大学農学部五十周年史』九州大学農学部　1971.10
古野純典編『九州大学医学部百年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会　2004.3
九州帝国大学医学部編『二十五年史』九州帝国大学医学部事務所　1928.10
九州大学創立五十周年記念会『九州大学五十年史学術史上巻』　九州大学創立五十周年記念会　1967.11
九州大学七十五周年史編集委員会『九州大学七十五年史』九州大学　1992.3
九州大学新聞部『九州帝国大学新聞』1927年～
九州大学韓国研究センター『朝鮮半島から九州大学に学ぶ』九州大学韓国研究センター　2002
折田悦郎『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書　2004
武継平『異文化のなかの郭沫若　日本留学時代』九州大学出版会　2002
緒方一夫「九州大学のベトナム交流秘話」『九州広報』47号　2004.9
金斑実「福岡にゆかりのある間島朝鮮人－盧基舜を中心に－」『日本語言文化研究　第三集下』延辺大学出版社　2014.6

（謝辞：本研究は九州大学文書館の折田悦郎先生の多大なご支援とご指導により成り立っています。この場を借りてお礼申し上げます。）